

ペルー—国の誇りを通貨に刻む—

清水達也



ペルーではここ数年、通貨ヌエボ・ソルの限定硬貨の発行やデザイン刷新が相次いでいる。ペルー中央銀行は二〇一〇年から、世界遺産であるマチュピチュなどペルーが誇る文化遺産をデザインした「富と誇り」シリーズの硬貨の発行を始めたほか（写真1左上）、主要コインである一、二、五ヌエボ・ソルのデザインも刷新した。二〇一二年には五種類すべての紙幣のデザインもマイナーチェンジした。いずれもデザインの変更だけで額面はこれまでと同



写真1 ペルーの主要硬貨（裏）。上段が1ヌエボ・ソル、下段が2、5ヌエボ・ソル（筆者撮影）

様である。発行から二〇年以上経つてもその価値が大きく変わっていないヌエボ・ソルは、ペルー国民の信用を獲得して、安定した経済成長を続けているペルー経済の象徴となっている。

しかしペルーの通貨が今日のように国民の信用を得るまでには長い道のりがあった。本稿ではこれまでにペルーの貨幣がたどった道のりを振り返るとともに、最近の動向について説明したい。

●貨幣発行の中心地

スペインの植民地であった一六〇〇—一九世紀、リマはメキシコ・シティと並んで新大陸の貨幣発行の中心地であった。一五四三年にペルー副王領が創設されたのち、新大陸で産出する金や銀を利用して貨幣を鑄造するために、一五六五年にはCasa Nacional de Mone-

das（国立造幣所）がリマに設けられた。一六世紀後半、造幣所が新大陸最大の銀鉱山があるポトシ（現在のボリビア）に移されたためにリマの造幣所は一時閉鎖されたが、一七世紀半ばには再開した。ここで作られたレアル銀貨やエスクード金貨は、新大陸のみならず本国のスペインでも広く流通した。

ペルーは一八二一年に共和国として独立したが、共和国政府が人々の支持を得る過程で、貨幣は独立の象徴として重要な役割を果たした。一八二三年、独立に抵抗を続けた副王政府はリマにあった造幣所を破壊し、鑄造に使う機械をクスコに運んだ。新しい貨幣の発行を妨げて、共和国への支持の広がりを阻止する狙いがあった。また、独立後も銀鉱山はしばらくの間、副王政府の支配下にあった

ため、共和国政府は銅で硬貨を作ったり、紙幣を発行したりした。しかしこれらの貨幣は人々の信用を得られず、広まらなかった。一八二五年、共和国政府の下で初めて金貨と銀貨が発行された。これらの硬貨のデザインとして国の紋章が採用された。現在でもすべての硬貨の表には紋章が刻まれている。紋章の中央部には、高級な繊維を生む南米ラクダ科のビクーニヤ、マラリヤの薬であるキニーネがとれるキナの木、角に入った金貨と、ペルーの豊かな資源が記されている（写真2）

●通貨への不信

一九二二年、ペルーでは通貨の発行を管理するために準備銀行（Banco de Reserva del Perú）が設立され、一九三一年に現在の



写真2 1ヌエボ・ソルの表に刻まれた国の紋章（筆者撮影）

中央銀行 (Banco Central de Reserva del Perú) に改組された。しかし二〇世紀のペルー経済を見る限り、中央銀行は通貨の価値を保つことができなかった。インフレーション、通貨単位の切り下げ、通貨の切り替えが繰り返され、国民は国内通貨に対して大きな不信感を抱いていた。

世界恐慌による経済危機を機に一九三一年に導入されたソル (正式には「ソル・デ・オロ」スペイン語で「金の太陽」の意) は、輸出産品の拡大を背景に一九六〇年代までは安定した価値を保っていた。しかし一九七〇年代以降は輸出の不調によりその価値が徐々に低下した。一九五〇年には一ドル〇一五ソル前後であったが替レートは、一九七五年には四〇ソルまで下がった。さらに一九八〇年代前半には財政支出の拡大によりインフレーションが進行して、年率一〇〇%を超えた。その結果、為替レートは一九八〇年に一ドル〇三〇〇ソル、一九八五年には一万三〇〇〇ソルに達した。

の(一ソル)、二分の一ソルなどの硬貨が発行されていたが、その後は発行される硬貨の額面が上昇した。しかしソルの価値はさらに大きく下落し、少額の硬貨は用を足さなくなった。高額の硬貨も、金属としての価値が額面を上回ったため、市中から姿を消した。この時代にはあめ玉やマッチ箱などが、雑貨店でお釣りの代わりに使われたこともあったという(ペルー貨幣博物館 Museo Numismático del Perú の展示による)。

一九八五年に始まった第一次ラシア政権は新たな通貨単位として「インティ」(ケチュア語で「太陽」の意) を導入し一〇〇〇ソル〇一インティに設定した。当初の為替レートは一ドル〇一三インティ程度であった。

通貨の切り替えによりインフレーションは一時的に収まったものの、債務危機に際してガルシア政権がとった財政拡大政策はその後再びインフレーションを加速させた。年間のインフレ率は一九八六年の七八%から一九九〇年には七四・八二%にまで上昇した。これにより再び硬貨は流通しなくなった。新たに発行された紙幣の額面も徐々に上昇し、一九九〇年には

五〇〇万インティ紙幣が発行された(写真3)。インティは信用を失い、国民は代わりに米ドルに頼った。輸入品の価格はもちろんのこと、家賃や民間企業の賃金、銀行ローンはドル建てが一般的になり、インティ建ての給与を受け取った公務員はすぐさまドルに両替した。こうして、街角に立つ両替商の姿はペルーの都市部の日常の風景となった。

●通貨の信用回復

一九九〇年に始まったフジモリ政権は、大胆な経済改革を実施して経済を安定させ、通貨の信用回復に務めた。一九九一年には新しい通貨単位ヌエボ・ソル (新しい



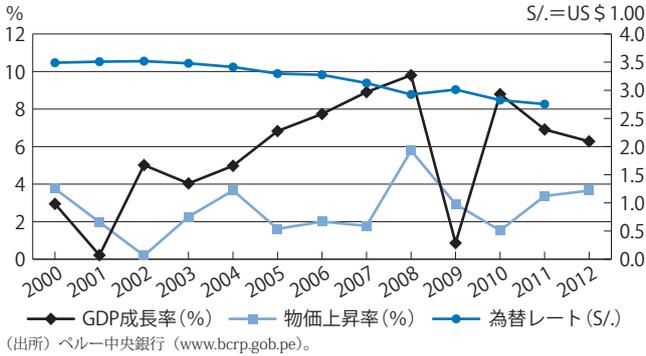
写真3 1990年のハイパーインフレーション時に発行された500万インティ紙幣(ペルー中央銀行提供)。

いソル」の意) を導入し、一〇〇万インティをヌエボ・ソルに設定した。経済改革では、補助金を廃止して財政支出を抑え、価格統制を撤廃した。その結果、導入直後は物価が上昇したものの、物価上昇率は次第に下がり、一九九七年には一〇%を切った。

二〇〇〇年代に入ってから歴史代政権は、市場経済を尊重し財政規律を重視する経済政策を継続した。その結果、GDP成長率、物価上昇率、為替レートなどいずれも安定した(図1)。

まずGDP成長率は、二〇〇二年以降ほぼ5%以上を記録している。世界金融危機の影響を受けた二〇〇九年もラテンアメリカ域内の多くの国々がマイナスのGDP成長率を記録したなか、ペルーはプラスの成長を維持した数少ない国のひとつとなった。次に物価上昇率は、中央銀行の目標とする二・五%プラスマイナス一%にほぼ収まり、概ね二・四%で推移している。さらに対米ドルの為替レートは一〇年ほど前からドル安の傾向が続いており、二〇〇二年の一ドル〇三・五二ヌエボ・ソルから、二〇一二年には二・五七ヌエボ・ソルへと二五%ほど切り上

図1 ペルーの経済指標



がっている。さらなるヌエボ・ソル高を避けるために、中央銀行がドル買い介入を頻繁に行っている。その結果、ヌエボ・ソルに対する国民の信用は大きく向上している。ペルー経済のドル化率（通貨にしめる米ドルの割合）をみると、一九九〇年代は七〇%前後で変化がなかったが、二〇〇〇年代に入ってから徐々に下がり、二〇一一年には約四〇%まで減少している。ペルーでは一般市民がヌエボ・ソルとドルの両方の銀行口座を持ち、ATMではどちらの口座

からもどちらの通貨でも引き出すことができる。街中のスーパーでは、価格表示はヌエボ・ソルであるが、ドル現金による支払いも可能である。このような自由な為替制度の下でドル化率が大きく減少していることは、国内通貨のヌエボ・ソルが再び国民の信用を取り戻していることを示している。

●国の誇りを通貨に刻む

ヌエボ・ソルを導入した一九九一年、中央銀行は一、五、一〇、二〇、五〇センチモ、一、二、五ヌエボ・ソルの八種類の硬貨と、一〇、二〇、五〇、一〇〇ヌエボ・ソルの四種類の紙幣を発行した。一九九五年には二〇〇ヌエボ・ソル紙幣を追加したほか、二〇一一年には価値が小さくて退蔵されることの多かった一センチティモ硬貨を廃止した。それ以外は硬貨・紙幣とも、現在も額面は変わっていない。

安定した経済成長や通貨に対する国民の信用回復を背景に、中央銀行はヌエボ・ソルの導入から二〇年になる二〇一一年前後から限定硬貨の発行や硬貨と紙幣のデザイン刷新に取り組んでいる。

まず二〇一〇年にはペルー各州

の代表的な文化遺産などをモチーフにした「ペルーの富と誇り」(Riqueza y Orgullo del Perú) シリーズの発行を開始した。全二六種類を毎年四枚、各一〇〇万枚発行する計画で、すべての発行が終わるまでには七年かかる。このシリーズの意図についてペルー中央銀行発券局ホルヘ・ネグロン氏は「通貨を単に交換の手段としてだけでなく文化の普及にも利用したい。また、長期間での発行を計画することで国民に通貨の価値の安定を印象づけたい」と語っている。絵柄にはマチュピチュ遺跡のほか、八〜一三世紀にペルーの北部海岸地域で栄えたモチエ文明などで用いられた儀礼用のナイフである「金のトゥミ」(Tumi de Oro) などペルー各地の文化遺産を採用した。

次に、五ヌエボ・ソルのデザインが刷新された。ナスカの地上絵にあるハチドリ(二ヌエボ・ソル)とドンカンドリ(五ヌエボ・ソル)の絵柄はそれまでと同じであるが、以前より大きくデザインされた(写真1下)。この二つの硬貨のみ偽造を難しくするために二種類の金属が使われている。

二〇一一年一月には紙幣のデ

ザインが刷新された。この刷新では偽造防止の最新技術が取り入れられたほか、裏のデザインが変更され、マチュピチュ遺跡(一〇ヌエボ・ソル)や南米最古といわれるカラル遺跡(二〇〇ヌエボ・ソル)のイメージが採用された。

そして二〇一二年八月には一ヌエボ・ソルのデザインも刷新された(写真1右上)。額面表示を従来の文字から数字に変えたほか、観光や貿易でペルーを振興するために政府が制定したトレードマークである「マルカ・ペルー」(Marca Peru)を取り入れた。

これはナスカの地上絵をモチーフにペルーの頭文字Pをデザインしたもので、ペルー産の商品などにつけられている。

インフレが激しかった時代は利用が進まなかったペルーの硬貨も、二〇年以上にわたる経済の安定によって国民の日常生活に欠かせないものとなった。通貨の価値を維持してきたという中央銀行の自信と、ラテンアメリカ域内では随一の安定成長を実現している国の誇りが硬貨にも刻まれている。

(しみず たつや/アジア経済研究所 前在ペルー海外研究員)